2011年度　　NB

国　語(B方式)

注　意

1. 問題は全部で8ページである。
2. 解答用紙に氏名・受験番号を忘れずに記入すること。
3. 解答はすべて解答用紙に記入すること。
4. 解答用紙は必ず提出のこと。この問題冊子は提出する必要はない。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

岡西惟中の「一時随筆」には、木下長嘯子の歌をしきりに引いている。惟中は寛永十六年鳥取に生れ、大坂に住むこと久しく、正徳元年没、年七十三。博く和漢の書を読み、歌は烏丸資慶に就き、俳諧は西山宗因にまなんで談林の論客ときこえた。*ここでは惟中の伝に立入らない。ただその著を揚げるのは談林派中はなはだ長嘯子をよろこぶ風気があったことを示すためである。この風気は芭蕉におよんで蕉門にも絶えない。ちなみに「一時随筆」は三巻、架蔵のは一冊本、奥付に天和三癸亥年初秋、大坂呉服町淀屋橋筋角、書林深江屋太郎兵衛板とある。長嘯子は慶安二年八十一歳をもって没しているから、天和三年はその没後三十四年になる。逆にいえば、惟中は慶安二年十一歳であった。江戸初期の近畿のひとびとにとって、かつての桃山の大名のうしろかげはさほど遠いものではなかったようである。「一時随筆」の中から二三の項を取って左に掲げる。

一　宗鑑法師の旧跡一夜庵再興の頃、国々所々の発句など集めし時、その所のなにがし一砂とて、我に従ふ俳士あり。五百三百のうちすぐれし作あり。

月や散るらん　響きに明くる　一夜庵

月の散るといふことば、珍しく思ひしに、近頃もののはしにて見あたりし長嘯子の歌に、

花も皆昔語りになりにけり散り残さるる有明の月

この歌の題は、「月前の落花」なり。作のあまりし歌なり。

惟中がこの歌を見たという「もののはし」とはなにかあきらかでない。「作のあまりし歌」とは惟中の評である。[1]技巧のはてにこういうことになるとでもいうほどの意か。後人の句に「響きに明くる」とあるのは先人の歌の技巧のひびきのようにきこえる。

（前略）この身を「薪」といふこと、もと経説より出でたり。歌に詠みてもあはれなることばなり。長嘯子の歌とて、

生ける日のやどの煙ぞまづ絶ゆる遂の薪の身は残れども

この歌、閑居貧家の体をそのままに詠みたるなり。（後略）

この歌は挙白集にも難挙白集にも出ていて「貧家」のけしきをよんだもののごとくではあるが、[2]窮状「そのまま」かどうか。疑うべし。*前若狭少将隠栖のくらしむきは歌の文句ほどひどくは追いつめられていなかったように見える。閑居といえば好んで貧窮を付けあわせたがる癖はいつからはじまったことか。

一　長嘯子の、五月五日、小田原といふ所にとまり給ふ時のことばに、ただ何となくのたまふは、「[3]京なる妻子どもの今日は言ふらん、思ふらん、*菖蒲刈り葺くやどのうちにてさぞ」とのたまへば、前なる人の、仰せらるることこそ歌のやうにも聞こゆれと書きつけてみれば、

妻子どもの今日は言ふらん思ふらん菖蒲刈り葺くやどのうちにて

上々の歌なり。いかさまにも歌人の常に歌になりゐ給ふは、ことばもおのづから歌の躰なるべし、いと[4]やさしくもけだかくもありけることよと、いつぞや挙白集を見て、感情忘れがたく侍るに、このごろ万葉を見れば、この躰あり。心をつけて見るべきなり。

山上憶良、宴を罷る歌一首

憶良らは今は罷らん子泣くらんそのかの母も我を待たんぞ

五月五日小田原にてしかじかのくだりは長嘯子すなわち木下勝俊みずから「はじめてあづまにいきける道の記」の文中にしるすところである。ときに家郷をおもって発することばはたくまずして歌となる。惟中は「歌人の常に歌になりゐ給ふ」という。勝俊もとより風雅の素質ゆたかであったことはうたがいない。この記とのちの「あづまのみちの記」とをあわせて見れば、勝俊のひととなりの一端をしのぶにたるべく、これを深く読むときはほとんどその宿命をさとることができるともいえるだろう。それにはまずこの人物の出自からはじめなくてはならない。

永禄の末年、勝俊は木下家定の嫡子として尾張にうまれ、もっとも父の妹ねねのいつくしみをこうむって長じた。ねねは秀吉の正室寧子、北政所である。天正十五年、勝俊十九歳、播磨国竜野城主となり、すでに津山森氏の女を納れて妻としている。これよりさき秀吉は関白にのぼった。ここに勝俊のために伝を作ろうとしても、少年は秀吉の影にかくれて、すがたも見えず、名も

きこえず、ただ叙任のことのみあって、伝なきにひとしい。すなわち、太閤記*を読めば事たりるというおもむきである。天正十八年、秀吉兵を発して小田原の北条氏を攻む。竜野侍従勝俊二十二歳また軍旅にしたがう。「あづまのみちの記」はそのおりの手記であった。これはさきのはじめての記とともに収めて挙白集第八にある。ちなみに、架蔵の挙白集は十巻八冊、巻末に慶安庚寅暮春吉辰とある。慶安三年板である。

きさらぎ二十日余りのころほひ、都を出で東に赴きけるに、人々なごり惜しみてうち送り侍りけるに、逢坂の関の清水のもとにて、今は帰りねと侍りけれど、なほ慕ふ心にや、行きもやらざりければ、駒をとどめて、

ただ頼め東路遠く別るともまたたち帰り逢坂の名を

書出しからすでに戦陣におもむくという気合はつゆほどもない。全文どこまで行ってもこの調子をもって通している。そこに刀槍はひらめかない。きこえるのは矢音ではなくて歌声ばかりである。

さて行くままに、駿河の国宇津の山にいたりぬ。業平朝臣*、この蔦の細道分け入りし旅のあはれも思ひ知られて、

宇津の山越えし人こそ昔なれ分くるは同じ蔦の細道[5]

(中略)同じ所、名所、しづはた山*とて富士浅間にてまします。見物ならし。詣でて詠める、

世の人の思ひ知れとやあさ衣神も織るてふしづはたの山

そこに殿下、御足を休め給ふて三日あまり御座ありけるほど、人々も疲れ治して……

この一ところに「殿下」を出して、わずかに秀吉の消息をつたえる。勝俊はいつも秀吉の麾下にあって、みずから打物とってたたかうことはなかったようである。このしづはた山のくだりにても、「みづからやすらひし家あるじ、こころありける人にて(中略)さかなもよほし、さけすすめ、こまやかにものがたりして」また歌をよんであそんでいる。やがて、富士のたかねの雪、ふもとは田子の浦、「入江小嶋ながめやる眺望」となっては、もとより歌は欠かせない。[6]小田原のいくさはどこ吹く風か。記の文はこう結ぶ。

このたび、道すがらの名所残らず見侍りて、愚かなる心に書き集め侍りけるは、[7]この道にこころざし深くして、後のあざけりを招くのみならし。

これはどうも尋常長袖者流の歌枕たずねあるく旅と似たようなふぜいである。従軍記としては比類がない。この後、勝俊は竜野より転じて若狭小浜の城主となる。ほどなく秀吉軍を催して海を渡ろうとする。勝俊またしたがって九州におもむく。すなわち「九州のみちの記」がある。挙白集第八所収。就いて本文を見る。

大相国、もろこし傾けさせ給はんとて、天正の末つかた、筑紫に御出あるべきよし、こと定まりにければ、日の本の兵残らず供奉す。自らも睦月の中の五日ごろに京を思ひ立ちなむとし侍りけるに、人のもとより御衣調じて給ふとて、この二首をなん(三字不明)られたりける。

8 たまほこの道の山風寒からば形見がてらに着なんとぞ思ふ

あまたには縫ひ重ねねど唐衣思ふ心は千重にぞありける

かの御衣、えならぬ物語の心を筆のかぎり美しく描きて、取る手もくゆるばかり、匂ひ薫き染められたり。返し、

君ならで道の山風寒しとも誰か厭はん旅の空まで

こころざし深き色香の唐衣かへすがへすも形見とや見ん

勝俊としては、これが文禄の役の門出であった。そういっても、行くさきは名護屋の陣どまり。鶏林まではわたらない。当地はまだ桃山の春のさかりだから、二年前の「あづまのみち」にもまさって、この道中、若狭少将はおもうまま文弱にうつつをぬかすことになる。「さて須磨明石の月をながめつつ」播磨の国に「二十日あまりとどまり」て、「そこにしたしかりける人のもと」にさくらの歌をよみのこして、ついで備中の国、吉備の中山につけば、「つれづれさのあまりここかしこみありきはべりて」とは、とてもいくさにいそぐ旅のようではない。その見あるくさきの山海のけしきはすべて [A] の世界である。9 いくさもまた「つれづれ」のわざか。すでにして筑紫路に入る。ここでもあちこちの名所をめぐり歌をよんで、ながながとつづく文は賞するに堪えるが引用をはぶく。やがて旅はおわる。

その日名護屋に至りて、草枕結び定むるほども侍らぬに、ほととぎす一声訪れて過ぎければ、

ほととぎす初音聞くには慰まで出でしふるさとなほぞ忘れぬ

汝も、帰らんにはしかじと鳴けばなるべし。ふるさとのたより求めて、かくなん言ひ遣はしける。

そこに、長歌たかだかとうたいあげて、そういってもアイチョウ切切「こころのやみのはれやらぬ」望郷の念をこめて、末に反歌一首。

わかれつついく年経ともいのちだにあらばふたたび帰らざらめや

当時のことにして、陣中に「なみだのみかかる袖こそわびしけれ」と歌った[10]若い武将のなげきはとくに武門の側から難ずるところとはならなかったようである。当時はまだ江戸ではないから、朱子学の規定とか葉隠の説法なんぞの小うるさいものはさいわいに流行していなかった。文武を一セットにしてあつかう考えはおそらく今川了俊*あたりからおこったものか。これはさだめて武家が編み出した政治思想である。文武はもと車の両輪なんぞではない。勝俊のごときも玄旨法印*にしたがって風雅をこそまなんだが、併せて細川氏伝来の弓馬の法をたずねたけはいはない。いや、それにはおよばなかった。陣中といえども、文は文をもってつらぬくことができた。都合のよいことに、秀吉がよろこんだのはこの勝俊の風雅である。聚楽第にして豊臣氏の歌よみといえば若狭少将のほかにない。桃山の寛闊ぶりははなやかであった。このとき勝俊の役どころは尋常歌よみの公卿のなんとか朝臣をしのいで、歌文の才はよくその任に堪えた。しかし、戦陣の間となると事情がちがう。鎧を著た勝俊は武将の列には立ちまじっても、鎧の中にはまぎれもなく歌人がいた。[11]歌人はもともと戦列から脱落していたにひとしい。武将としては、ずっこけであった。

（石川淳『江戸文学掌記』による）

＊談林＝俳諧の流派。伝統的な「貞門」に対して、ことばの自由さを主張した。

＊経説＝仏教の教え。仏典では、釈尊が入滅することを「薪尽く」と言う。

＊前若狭少将＝長嘯子のこと。若狭国小浜城主で少将であったことにちなむ呼称。

＊菖蒲刈り葺く＝五月五日の端午の節句の習わし。邪気を払うために菖蒲（ショウブ）を軒の端にかけた。

＊太閤記＝江戸時代前期に出版された、豊臣秀吉の伝記を中心に書かれた軍記。

＊業平朝臣＝平安時代の歌人、在原業平。『伊勢物語』の主人公のモデル。
＊しづはた山＝駿河国の歌枕。浅間神社がある。「しづはた」は「しづ」（日本固有の織り方の布）を織る織機、または織った布。
＊長袖者＝鎧を着るために袖をくくり上げる武士に対して、常に袖を長くしていた公卿・僧侶・医師・学者などを言う。
＊大相国＝太政大臣の中国名。ここは豊臣秀吉のこと。
＊鶏林＝朝鮮半島のこと。
＊今川了俊＝室町時代の武将で歌人。足利義満に仕えた。
＊玄旨法印＝戦国時代の武将で歌人の細川幽斎のこと。

問一　傍線部1「技巧のはてにこういうことになる」は、長嘯子の歌のどの表現についてのことばか。長嘯子の「花も皆……」の歌から十字以内で抜き出せ（句読点も含む。以下同じ）。

問二　傍線部2「窮状『そのまま』かどうか。疑うべし」とあるが、筆者は長嘯子の貧窮をどのように考えているか。十五字以内で書け。

問三　傍線部3「京なる妻子どもの今日は言ふらん、思ふらん」の訳として最適なものを次のア～オから選び、記号を書け。

ア　都にいる妻や子どもたちは、五月五日の節句の今日、どうしているのだろうか、私にはわからない。
イ　都に残してきた妻や子どもたちは、五月五日の節句の今日、楽しんでいるにちがいない。
ウ　都に残してきた妻や子どもたちは、五月五日の節句の今日、私のことを話して、慕っているだろう。
エ　華やかな都の女性や子どもたちも、五月五日の節句の今日だけは、いくさの勝利を祈っているはずだ。
オ　華やかな都の女性や子どもたちは、五月五日の節句の今日ばかりは、戦いのことを忘れていることだろう。

問四　傍線部4「やさしくもけだかくもありけることよ」とあるが、岡西惟中は何に感銘しているのか。次の空欄に当てはまることばを、傍線部4より後の文章から、十字以内で抜き出せ。

ことばが［　　］こと

問五　傍線部5「同じ」は何と何が同じなのか。最適なものを次のア～オから選び、記号を書け。

ア　武将として山を越えることと、歌人として山を越えること

イ　古の武人が苦労して越えた山と、今戦いのために自分が越えようとしている山

ウ　豊臣秀吉が先に進んだ蔦の細道と、後れて今自分が進んでいる細道

エ　都で想像していた宇津の山と、実際に見る宇津の山

オ　在原業平が分け入った蔦の細道と、今自分が分け入っている細道

問六　傍線部6「小田原のいくさはどこ吹く風か」を、筆者が具体的に説明している箇所を三十五字以内で抜き出し、その最初と最後の五字を書け。

問七　傍線部7「この」は何を指しているか。漢字一字で書け。

問八　傍線部8「あまたには……千重にぞありける」の歌の意味の説明として最適なものを、次のア～オから選び、記号を書け。

ア　香を何度もたきしめた衣で、それにあなたを強く思う心を込めていると言い、贈り物のすばらしさを自分で褒め上げ、相手を圧倒しようとした。

イ　衣はたくさん縫い重ねていないが、あなたを思う心は幾重にも重なっていると言い、贈り物について謙遜しながら、相手を深く思う心を伝えた。

ウ　たくさんの苦労を重ねて、ようやく手に入れた衣であることを言い、この贈り物を身に着けることで、相手が無事に帰ってくることを願った。

エ　衣は古ぼけた粗末なものだが、先祖代々伝えてきたものであることを言い、この贈り物の呪力によって、相手が武運に恵まれるはずであると祝福した。

オ　薄い衣ではあるが、一族が心を合わせて調達したものであると言い、よい贈り物ができないことを恥じながらも、相手が自分たちを引き立ててくれることを求めた。

問九　空欄Aを、本文中の漢字二字で埋めよ。

問十　傍線部9「いくさもまた『つれづれ』のわざか」とはどういうことか。次の文の空欄を埋める形で書け（十字以内。自分のことばで書くこと）。

長嘯子にとって、戦いは名所見物と同じく［　　］であったか、ということ。

問十一　傍線部10「若い武将のなげきは……ならなかったようである」とあるが、なぜか。理由を二十五字以内で説明せよ。

問十二　傍線部11「歌人はもともと戦列から脱落していたにひとしい」の説明として最適なものをア～オから選び、記号を書け。

ア　長嘯子は戦場でも優れた和歌を詠むことばかりに心を奪われ、武功を立てられず、秀吉からうとまれたということ。

イ　秀吉をはじめとする武将たちは、軟弱な長嘯子を軽蔑し、最初から武功など期待していなかったということ。

ウ　長嘯子が戦場でも歌文を作り続けたことは、秀吉の野心のための戦いへの抵抗という意味を持ったということ。

エ　もののあわれを知る歌人は、非情な判断を下さなければならない武将には本来向かないということ。

オ　戦場にあっても、心の内では歌文のことばかり考えていた長嘯子は、戦列にいないも同然であったということ。

問十三　二重傍線部アイチョウを漢字に直せ。